

# 斯くありたしと思ふこと

醫學博士 瀨川 昌世

## ○壯健な身體と善良な習慣の

### 基礎を幼時期につくりたい

子供を丈夫に育て、立派に教育するのは母の第一の務であること云ふ事は、私が申す迄もないのであります。近來幼児の保健保護を國家が進んでやるやうになつたのは、子供の健全が、國家の將來の盛衰に重大な關係があるからであります。わかりやすく申せば、大人が健康であるか虚弱であるかは、其人の幼年時の健康不健康に依つて定まるものでありますから、健全な國家をつくる爲には、幼児の健康に留意して、保健保護の務によるより外に道はないのであります。私は内務省の保健調査會員として、兒童の保健保護にたづさはつて居りますから、其に就いて氣のついた事を少しお話ししたのであります。

現在に於ける小兒の保護教育の様子を見ると、學

業成績ばかりを重く見て、健全な體の養成(保健)善良な性質の養成(德育)に注意をはらつて居らないやうです。之は、子供自身にも、又子供の親としても、又子供を教へ導く教育家にとつても、健全な體や善い性質よりも、優秀な學業の成績の方が、現在にはめだつて有望なやうに見えるからだと思ふのであります。然し、幼時學問が出來ると云ふ事は、子供の前途、國家の將來には、おもしろくない事と思ひます。それが爲に、むやみに弱い子供でも頭のにぶい子供でも、一切かまはずに、叱つたりすかしたりして、無理に勉強させる、病後恢復の時期にも、健康の恢復せぬ中に、無理に學校へやる、教師もむやみに學校へ出ることを勧める、充分休養をする暇もやらずに、缺席の少いのを誇りとする傾きがあります。小さい子供(小學校卒業位)に、名のいゝ學校に無理に入學させようとして、無理な試験勉強をさせ、子供に心配させて、子供の體とか性質等に向

かまはぬのを見ます。之は、畢竟現在の子供の親や教育者自身の子供の時の有様や、現在肩書萬能時代を標準として、子供に強ひるから起るのであります。今後は、體の健全、善い人格、能力、即ち働ける人間が、最も社會に優秀な位置を得られる時代となると思ひます。子供の將來を考へたならば、子供の時に、健全な體を養ひ、善良な性質を築き上げる事を心掛けねば、一生の不幸を來します。學問は健全な體を持つてゐて、よい性質があればいつも出來ます。壯健な體と善良な精神は、幼少の時に基礎をつくつておかねば、大人になつて手遅れとなります。この事を世の親たち、教育家達にお話し申したいのであります。

### ○運動遊戲の時に共同責任義務の考をもたせたい

近來學校でも體育に注意して、意を體操遊戲に用ふる事は、結構な事でありますが、この勢を利用して、子供に共同責任義務の觀念を頭にしみこませたいと思ひます。一體、日本人は、共同でものをする事は甚だ不得手であり、共同一致の性質に缺けてゐ

ると思ひます。個人としては、立派な事業家でも、何々會、何々協會の仕事になると、少しも共同する事が出來ず、議論ばかりして何も出來ないのであります。これは、外國人どよほど違つて居る事で、今後の世の中では、多數集合の協力が必要でありますから、この状態では外國人どとても競争が出來ないのでです。この事は、今迄の人々が子供の時から共同するといふ事に、馴らされてゐなかつたからであります。個々獨立しては勉強もし、教育もするけれども、共同一致の要素にかけてゐるからであります。これは無理もない話でありますが、今後の日本人には、どうしても子供の中から共同して事をするといふ事を、頭に入れて置く必要があります。共同して物をしなければ、物事は大成しないものだといふ事を知らず／＼に習慣的に頭に入れて置く必要があります。この共同一致の精神は、教場で先生が話をしたり、讀本で教へたりしても、あまり効果がないだらうと思ひます。私の考では、運動競争遊戲の際、團體的遊戲をして奨励したならばよろしいと思ひます。幼児でも、團體の一人として運動をする時には、共同すると同時に、自分の義務、責任も、頭に自然にし

み込むものであります。私は子供の遊戯の種類は知りませんが、例へば綱引きのやうなものやバスケット・ボールのやうなものでも、自分一人でやるばかりでなく、他人と協調協力してやらなければ、到底勝つ事が出来ない、と云ふ精神と同時に、自分が一人でもどうしてもしなければならぬといふ義務、責任、——義務責任といふ言葉の意味はわからなくとも、その内容——を頭にしみ込ませることが出来ます。

私は、中學、高等學校、大學時代に選手をやつてゐました經驗上、現在でも、色々相談し、共同して仕事をする場合に、昔やはり運動をやつた人間が、共同することがやりよいと云ふ事から考へついで、小學時代から運動の際に共同の精神を養つて置いたならば、種々な相談會、會合の時に、議論ばかりして内輪もめしては、會の事業が何一つとまとまつて出来ない、と云ふ今の日本人の一大缺點が、多少でも矯正する事が出来ると思ひます。

### ○どせう屋

夏の夕、山の手のとある家に、どせう屋が荷をおろ

して、どせうをさき始めました。近所のやつちやんと進さんと親子さんがすぐにかけつけました。三人は竿にあげられた魚、狙の上におどる魚、どせう屋の手につかまる魚にも次々にいそがしく眼をうつしてゐましたが、その中で三人の眸はどせう屋の手にあつまりました。

「あら、さられてしまふわ。」

「いたいだらうね」

「やあ、ちゆうつて泣いてるよ。」

片唾をのんで見てゐる三人の口からは時々かういふ言葉がもれました。

どせうはどん／＼出来てお皿に車形にならべられて行きました。親子さんは面白くてたまらないといふ様に見つゝけてゐましたが、やつちやんと進さんは、ふと、少しはなれて下してあつた桶の中にあるどせうに氣がつかしました。たちまち四つの小さい手はその桶に亂入しました。濫い手をきらつて、どせうがにげまはるのが面白いので矢鱈につかみ始めました。

しかし、どせう屋のをぢさんは少しも氣がつかず、せつせと割いて、次々に皿へならべてゐました。